

二〇二六年度 一般選抜 学力検査(国語)

現代の国語、言語文化
(古文・漢文を除く)

解答番号

1

〜

29

一 問題文を読んで後の問1～問9に答えなさい。

不満や苦しみがあっても、そこから抜け出そうと何かを始めるのは難しいことです。

一度できあがった生活習慣は、ひじょうにしぶとい。根本的な心理として、可能なかぎり何でも「痛気持ちいい」ものとしてマゾヒズム的に耐えてしまおうとする傾向がある。極端には、ここでこうして生きているのは自分の運命だ、と捉えて耐え忍んでしまうかもしれない。

生せいとは、他者と関わることです。純粹にたった一人の状態はありません。外から影響を受けていない「裸の自分」など、ありえません。どこまで皮を剥むいても出てくるのは、他者によって「つくられた」構築された「自分であり、いわば、自分(1)はつねに「着衣」なのです。

自分は「他者によって構築されたもの」である。

この肉体は、両親、さらに前の世代の遺伝子がシャッフルされたものです。遺伝的な傾向があつた上で、成長過程において他者と関わりながら、考え方や好き嫌いができていく。たとえば、サッカー観戦が好きだとして、それは必ずしもひとりでいそがなつたわけではない。それが「A」に構築された好みであることを、やろうと思えば、ある程度は客観視できるでしょう。父親が週末はサッカー観戦をしていたから、自分もいつしか好きになつていった、などの事情がある。また、人間だけでなく、物理的環境や、架空のキャラクターなど、広い意味での他者たちが自分の構築に関わっています。

裸の自分などないというのは、注意してほしいのですが、「個性」がないということではありません。私たちは個性的な存在です。しかし、一〇〇%自分発の個性はない。個性とは、私たちひとりひとりが「どういう他者とのように関わってきたか」の違いなのです。個性は、他者との出会いで構築される。自分の成分としての他者が、自分の「欲望」や「享楽」のゲンセン(7)になつている。私たちは個性的だが、個性とは「A」なものである——本書では、この考え方をつねにネットウ(1)に置いてください。

そして、言語という存在。

(2) 言語を使えている、すなわち「自分に言語がインストールされている」のもまた、他者に乗っ取られているということなのです。

「リング」でも「これは美しい」でも、当たり前ですが、言語は自分自身ではない。言語は他者です。そして言語は、周りの他者（これは「他人」の意味）からインストールされたものです。他者が言葉をどう使うかを真似ることまねで、言語習得をしたわけです。

言語は、自分が生まれる以前からの「用法」を真似するという形でインストールされた。同様に、すべての他者もまた、他者による用法を真似して、言語を使えるようになっていく。

そういう言語習得の過程で私たちは、他者から、ものの考え方の基本的な方向づけを受けてしまいます。たとえば、何を「美しい」と言うのか、何が「遊び」であり何がそうでないのか……育った環境によって、用法⇨意味の範囲が異なりますね。

大げさに思うかもしれませんが、言葉のニュアンスの違いには、何か偏った価値観（イデオロギー）が含まれていると捉えるべきです。

すなわち、言語は、環境の「こうするもんだ」⇨コードのなかで、意味を与えられるのです。だから、言語習得とは、環境のコードを刷り込まれることなのです。言語習得と同時に、特定の環境でのノリを強いられることになっている。

言葉の意味は、環境のコードのなかにある。

言葉は、実際に使われて初めて意味をもつ。本書は、こうした言語観をセンテンスウにして話を進めます。これは、ワイトゲンシュタインという哲学者の考えにもとづいています。

国語辞典に載っているのは、言葉の「本当の意味」ではありません。載っているのは、代表的な **B** です。辞典とは、人々が言葉をどう使ってきたのかの「歴史書」なのです。

I

言語習得とは、ある環境において、ものをどう考えるかの根つこのレベルで「C」を受けるようなことなのです。これはひじょうに根深い。言葉ひとつのレベルでイデオロギーを刷り込まれている、これを自覚するのはなかなか難しいでしょう。だから、こう言わねばならない。

言語を通して、私たちは、他者に乗っ取られている。

それにしても、言語とは、不思議な存在です——。言語は、物質的なモノのように触れることはできない、でも、独特のあり方で存在していて、強力に人生を左右するものです。

II

この「言語の存在」とは何なのかを考えてみましょう。

スケールのデカイ話になりますが、人間にとつて「世界」は、二重になっている。³⁾

普通に考えて、リアルに存在するのは、モノ⇕物質の世界です。物質的な現実です（ここからは、「物質的」な現実を、たんに「現実」と言うことにします）。

そこに、もうひとつの次元として、言語の世界が重なっている。

III

「リンゴ」のように、普通に使う言葉は、現実に根ざしている。「リンゴ」は、現実のあの赤くて甘酸っぱい、手のひら大の果物を指す名前である。私たちは、言語と現実を結びつけて思考し、行為する。

しかし言語には、現実に縛られない独自の自由もあります。⁴⁾

たとえば、テーブルの上にリンゴがあつても、たんに言葉として、「リンゴは箱のなかにある」と、非現実的なことを言うこともできる。「ここにはクジラがいる」と言うことさえできる。

何でも「言えるには言える」わけです。

言語はそれだけで架空の世界をつくれる。だから、小説や詩を書くことができる。先ほどの「リンゴ」は現実に根ざした普通の言葉ですが、何を指すのでもないたんなる言葉をつくることもできる——「リゴンゴン」とか。さらには、論理的にありえないことまで「言えて」しまう——「リンゴはクジラだ」とか、「丸い四角形」とか。

IV

言語能力は、**D**に行為しながら身につけていきますが、言語それ自体は、行為から切り離して使うことができる。要は、「言葉遊び」ができるということです。

言葉遊びは、言語を「それ自体」として取り扱うから、できるのです。

このことに十分注意を向けてください。言葉は、レゴ・ブロックで何かをつくるように、どうにでも、遊びで**E**ことができる。

言語それ自体は、現実から分離している。

言語それ自体は、現実的に何をするかに関係ない、「他の」世界に属している。

V

このことを、「言語の他者性」と呼ぶことにしたい。すなわち言語とは、「現実まるごとに対する他者」なのです。あるいは、リアルなモノに対し、言語は「ヴァーチャル」な存在であると言ってもいいでしょう。ヴァーチャルな存在としての言語が、現実まるごとに対する他者として、現実から分離しているのです。

言語の他者性（言語は現実から分離している）のために、現実と言語の「唯一正しい」対応関係はないということになる。だから、環境によって言葉の意味が変わるのです。

そして、これがひじょうに重要ですが、まさしく同じ原理、言語の他者性（言語は現実から分離している）によって、言葉の、

ある環境での偏った意味づけは必然的ではなく、いつでもバラすことができる、別の意味づけの可能性がつねに開かれている、ということになります。

(千葉雅也^{ちば まさきや} 『勉強の哲学——来たるべきバカのために』による。出題の都合上、一部中略した箇所がある。)

(注) マゾヒズム的——相手から苦痛を与えられることを好むこと。

問1

傍線部(ア)と(ウ)と同じ漢字を含む熟語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は、
1
2
3

(配点6点)

(ア) ゲンセン

1

- ① 年を取るとルイセンが緩む。
- ② 原因をこと細かくセンサクする。
- ③ 家族とオンセン旅行に行く。
- ④ センスイして海中を探索する。
- ⑤ 川のシンセンを見きわめる。

(イ) ネットウ

2

- ① 彼女にはトウソツリヨクがある。
- ② 兄は趣味にポットウしている。
- ③ 祖父は一般ビョウトウに移った。
- ④ この賞は新人作家のトウリュウモンだ。
- ⑤ トウキを目的として不動産を買う。

(ウ) ゼンテイ

3

- ① 道路交通法にテイシヨクする。
- ② テイボウを散策する。
- ③ 修学旅行のコウテイを確かめる。
- ④ 矛盾がロテイする。
- ⑤ 情報をテイキョウする。

問2

次の文は本文の一部であるが、文中の ～ のどこに入れるのが最も適當か。次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、。

(配点3点)

こうした言語の自由さに、あらためて驚いてほしいのです。

- ① I
- ② II
- ③ III
- ④ IV
- ⑤ V

問3

二か所の空欄 に共通して当てはまるものとして最も適當なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、。

(配点3点)

- ① 自然発生的
- ② 環境配慮的
- ③ 隔世遺伝的
- ④ 他者依存的
- ⑤ 独立自尊的

問4

空欄

B

く

E

を補うのに最も適当なものを、次の各群の①く⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は、

6

く

9

。

(配点12点)

B

6

- ⑤ 表記
- ④ 語彙
- ③ 用法
- ② 方法
- ① 意義

C

7

- ⑤ 試験
- ④ 治療
- ③ 感銘
- ② 洗脳
- ① 衝撃

D

8

- ⑤ 体系的
- ④ 衝動的
- ③ 事務的
- ② 現実的
- ① 積極的

E

9

- ⑤ 普及させる
- ④ 組み合わせる
- ③ 省略する
- ② 引き受ける
- ① 共有する

問5

傍線部(1)「自分はつねに『着衣』なのです」とあるが、どういふことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、

10。

(配点5点)

- ① 自分は、不満や苦しみがあってもそれを耐え忍ぶことによつてつくられるものであり、つねにありのままの自分ではいられないということ。
- ② 自分は、他者との関わりの結果として形づくられたものであり、外部からの影響を全く受けていない人間は存在しないということ。
- ③ 自分は、両親やさらに前の世代の遺伝子によつて形成されたものであり、外部からの影響を受けてもそれらが変化することはないということ。
- ④ 自分は、自分以外のさまざまなものによつて構築されたものであり、他人と異なる特徴や独自性をもっている人はいないということ。
- ⑤ 自分は、自分以外の人間の影響を受けて形作られるものであり、ほんとうの自分がどのようなものであるかは誰にもわからないということ。

問6

傍線部②「言語を使っている、すなわち『自分に言語がインストールされている』のもまた、他者に乗っ取られているということなのです」とあるが、筆者はなぜこのように考えているのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、11。

(配点5点)

- ① 言語は自分自身ではないという意味で他者であり、自分の意思に反して周囲の人間から強制的に身につけさせられるものだから。
- ② 言語は生来的な存在であり、言語の習得は自分が生まれる以前に生きた他者が定めた言葉の意味を刷り込まれる行為だから。
- ③ 言語は周囲の人間から教わることでしか体得できないものであり、教え方により、学ぶ人の理解度が変わってきてしまうから。
- ④ 言語は他者が使用している言葉を模倣しながら習得するものであり、その習得過程で誤った価値観を植え付けられることもあるから。
- ⑤ 言語は他の人の使い方を真似ることで身につくものであり、言語を習得する過程で物事の捉え方がある程度定められてしまうから。

問7

傍線部③「人間にとって『世界』は、二重になっている」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、12。

(配点5点)

- ① 私たちが認識している世界は、物質的な現実とそれを言語によって表現した世界という二つの次元で構成されているということ。
- ② 私たちの考える現実とは、リアルにモノが存在する物質的な世界と言語がつくりだした束縛の強い世界が重なっているということ。
- ③ 私たちが暮らす世界は、言語と現実とを結びつけて考える世界と言語が現実から分離している世界の二つに分けられるということ。
- ④ 私たちはリアルなモノの世界にいますと考えがちですが、実際はヴァーチャルな存在としての言語がつくる世界に属しているということ。
- ⑤ 私たちは物質的な現実には身を置いているが、そこには現実から独立した自由をもつ言語で表される世界も存在しているということ。

問8

傍線部(4)「現実には縛られない独自の自由」とあるが、この具体例として適当でないものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、

13。

(配点5点)

- ① 目の前に真っ赤なリングがある場合でも、「私の目の前には黄色いバナナがある」と表現することができる。
- ② 目の前には何もない場合でも、「私の目の前にはたくさんの赤いリングがある」と表現することができる。
- ③ 目の前にある真っ赤なリングを見て、「私の目の前には赤いリゴンゴンがある」と表現することができる。
- ④ 箱に入れられている真っ赤なリングを見て、「赤いリングが箱のなかにある」と表現することができる。
- ⑤ 箱のなかのたくさんのリングを見て、「リングのなかにたくさんの箱が入っている」と表現することができる。

問9

本文の内容に合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、

14。

(配点6点)

- ① 辞書に載っている言葉の意味は、必ずしも適切であるとは限らないため、言葉の正確な使い方を身につけるためには、実際にその言葉を使ってみなければならない。
- ② 私たちの個性は、さまざまな他者との出会いによって形成されたものであり、他者との交流の機会が多くなるほど、個性はより豊かでユニークなものになる。
- ③ 言語は、実際に物質として存在していないという意味でヴァーチャルな存在だといえるが、リアルなモノよりも私たちの人生に大きな影響を与えている。
- ④ 環境が異なれば、言葉のニュアンスにわずかな違いが生まれることがあるため、現実と言語の正しい対応関係などというものは存在しないといえる。
- ⑤ 言葉は、環境のコードのなかで意味を与えられるが、言語そのものもつ自由性によって、その意味づけを無効化し、別の意味をつくりだすこともできる。

二 問題文を読んで後の問1～問9に答えなさい。

「^(注1)所在なき痒み問題」では、皮膚への接触の位置が痒みの位置といつまでも整合しないことによる不和が、「からだ」の感覚を損なう原因となっていました。これは触覚と痒みの感覚の不整合と捉えることもできませんし、痒みが生まれた際に足を見て、「ここ」と視覚的に指し示すことのできる場所に、しかし「痒み」が無かったという意味では、視覚と痒みの感覚の不整合であるともいえます。これらを **X** すると、複数の感覚の情報が整合的であることが、「からだ」の感覚を安定的に維持するうえで重要であることを示しているようにみえます。

この⁽¹⁾感覚間情報の不一致について、もう少し身近な状況で思考実験（想像上の実験）をしてみましよう。目を閉じて、自分の右手が、たった今どこにあるのか想像してみてください。ある程度、明確に意識できるはずです。このような身体各部の三次元空間における位置に対する内的な感覚のことを専門的には固有感覚と呼びます（触覚も位置情報を持っていますが、これは固有感覚とは独立に生成される、皮膚上のマップとイメージしましょう）。

さて、思考実験を続けます。目を開けると、その位置に右手は確かにありますね。これこそが、身体が「からだ」であることを保証している、視覚と固有感覚の整合的狀態です。

もし、目を開けたら、右手が思っていたところと違う位置にあったらどうでしょうか？ そんなことは馬鹿げていて、想像することには意味はないと考える人もいるかもしれませんが、しかし、おそらく先程の痒みの事例に負けず劣らずに一般的な事例のほずですが、寝起きの際に、長い時間、物理的に圧迫されていた腕が麻痺^{まひ}して、自分が思っていたのと全く違う位置に腕があったという経験はありませんか？ そして、この自分が思っていたのと違う位置に身体があることを視覚的に確認した瞬間に、一気に、腕が「からだ」ではなくなってしまう感じを帯びるはずです。

麻痺そのものが「からだ」の感覚を奪ったのではなく、「思った位置に腕がない」や「動いているはずの腕が動いていない」と

② いった、視覚、運動感覚、固有感覚の間の不整合を意識的に確認することによって、腕から所有感が失われるのです。

「からだ」というものが、複数の感覚の情報が相互に整合的であることによつて生じているらしい、ということがわかつてきたところで、他にもいろいろな感覚の組み合わせで思考実験をすすめてみましょう。

自分の右手の^(ア)コウを誰かが触っているのが目で見えておきます。このとき、対応する触感が全く感じられなかったらどうでしょうか。この場合、自分の手が麻痺していることを疑うかもしれませんし、もしかしたら、夢の中の出来事、あるいは誰か別の人間の身体の中に自分が入り込んでしまったというようなSF的な感覚に襲われるかもしれません。いずれにせよ、目の前の右手に対する「からだ」が急速に失われていくのは容易に想像できます。

同じような例として、自分の意思とは無関係に、自分の右手なり左手なりが勝手に動いていたらどうでしょうか。これは先程の、腕の圧迫による麻痺の例と真逆のケースですね。この場合、身体はいつもよりエネルギーギッシュに動いていることになるので、「からだ」の感覚が消えてしまうことはないように思うかもしれません。しかし、想像してみるとわかりますが、このような状況で心穏やかでいることはほとんど不可能であるように思います。この不穏さとは、まさに手から「自分」が失われてしまっていることと関係しているはずです。

実は、ここで説明したような状況は、「エイリアンハンド・シンドローム」という（やはり不穏な）名前がついている通り、実際に存在する症例と対応しています。エイリアンという言葉が **Y** に示している通り、自分とは別の誰かの腕を保持している、**A** 自分の腕が別の誰かに乗っ取られたような感覚となり、ときに自分に対する攻撃性すら感じる方向に作用することがわかれます。これにせよ、この場合でも、やはり、自分の身体のリアーティーであるところの「からだ」が喪失する方向に作用することがわかります。

私たちの身体に生まれる、それが自分のからだであるという感覚Ⅱ「からだ」は、複数の感覚の情報が整合していることによつて担保されていることが理解できたと思います。こうした「からだ」の特性を一般向けに説明するときには、筆者は、複数の楽

器によって奏でられるオーケストラの比喩を借りて、オーケストラ認知という言葉で解説するようにしています。

B、オーケストラが心地よく響いている状態と、(本来)モノである身体が「からだ」であると自然に感じられている状態とを対応させるということです。オーケストラが心地よい響きを作り出すためには、楽器間でピッチ(周波数)が合っていること、および、時間がズレていないことがカンのヨウです。ピッチが合っているとは、すでに検討したように、「からだ」において、複数の感覚由来の位置情報が合致している状態と考えればよいでしょう。

⁽⁴⁾ それでは「からだ」において、感覚間の時間にズレがあると、どんなことが起きるのでしょうか？ ここでも思考実験をしてみましょう。

目の前の人が、自分の右腕を肩から手首に向かってゆっくりとなぞっているが、腕に描かれる視覚的な軌跡が、実際に感じられる触覚より3秒ほど遅れているとします。

C、触覚がすでに手首付近に到達しつつある段階で、腕をなぞる相手の指の位置はまだ肘を通過していない、といった具合です。この場合、おそらく、自分の腕そのものを直接に見ているというよりは、カメラで記録された過去の腕の映像を、モニタのようなものを通して眺めているような気持ちになるのではないのでしょうか。

では、それとは逆に、触覚よりも視覚が先行していたらどうでしょう。少しイメージすることが難しいですが、筆者の想像では、義手や義足などから、配線を通じて感覚情報が遅れて伝送されているような気持ちになるのではないかと思います。いずれにせよ、感覚間の時間の同期が崩れると、著しく「からだ」の感覚が減退するであろうことは、容易に想像できます。

オーケストラは、特定の感覚単体では「からだ」は生まれえない、というテーゼを説明するうえでも非常に良い例になります。ここでは、もう少し身近なジャンルとして、ポップミュージックを例に考えてみましょう。通常、ポップソングなどのスタジオ録音は楽器ごとで別録をして、最後にミキシングされることはご存知かと思います。このミキシング作業において、個々の楽器演奏データに関する各種の^(注4)パラメータを適切に設定することによって、それらの演奏が一体となり、音楽としての奥行きが生まれることになるのです。

D、みなさんは、テレビなどで、ヒットソングのベースやパーカッションの(注5)トラック部分のみを聴く、というような経験をしたことがあるでしょうか。このとき、その原曲を知らない人にとつては、楽器単体の(注6)フレーズのみでは、いかにも奥行きを欠いた、単なる楽器の運指の練習に立ち会っているような気分になるでしょう。つまり、楽器単体の演奏を聴いているだけでは音楽は生まれません。この関係は、感覚単体では「からだ」が生まれぬことに対応しています。

他方で、原曲をよく知っている人にとつては、例えばベースのフレーズを聞いただけで、他の楽器が脳内で補完的に再生され、全体として生き生きとした音楽を感じることができるよう。現に聴こえてくる物理的な音響と、脳内で再生される内的な音響がハイブリッド(注7)でキョウドウ(注5)することによって、単一の楽器演奏であつても、音楽として昇華することができるよう。これは、すでに何度か例示したように、単なる触覚刺激が、触られている場所周辺の身体の視覚像を内的に生み出し、それによって「からだ」の生き生きとしたリアリティーが生まれていることと対応します。

引き続き、身体の視覚的な形状に関する条件を検討してみます。ここでも、オーケストラ認知の考え方を使って、理解してみましよう。

通常、各楽器から出される音には、基本周波数を基点として多くの倍音（基音の整数倍の周波数を持つ音）を含んでおり、それぞれの楽器らしさを作るのは、それらの音の波形であることはよく知られています。実際、全ての倍音を削って基本周波数のみになると、ピッチは変わらないのでメロディーは維持されますが、機械的な「ピー」という音（サイン波）となるため、楽器らしい奥行きのある感触は全く失われてしまいます。そのような機械的な音が混ざるような合奏では、オーケストラとしての心地よい響きとはならないでしょう。

同様に、例えば手の形が、円形や多角形のような幾何学的な形をしていたら、たとえ位置感覚が整合していても（つまりピッチが揃そろっていても）、「からだ」のリアリティーは減退してしまいます。実際に、身体が「からだ」となるためには、複数感覚間の時空間整合に加えて、適切な身体形状の呈示が要件となることがわかっています。

(小鷹^{こたけり}研理『からだの錯覚 脳と感覚が作り出す不思議な世界』による。出題の都合上、一部中略した箇所がある。)

(注1) 所在なき痒み問題——身体はどこかが痒いだけでなく、いくら探ってみてもどこが痒いのがわからないという問題。

(注2) テーゼ——ある問題に対してたてられた命題。

(注3) ミキシング——二つ以上の音楽を合わせて一つの音にすること。

(注4) パラメータ——条件や基準を示す指標。

(注5) トラック——各楽器の音源を個別に録音するためのチャンネル。

(注6) フレーズ——旋律の一区切り。

(注7) ハイブリッド——二つの異なる要素を組み合わせたもの。

問1 傍線部(ア)と(ウ)と同じ漢字を含む熟語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は、
15
17

(配点6点)

(ア) コウ

15

- ① えびはコウカクルイである。
- ② 父はコウシキテニスに興味だ。
- ③ 歌舞伎の顔見世コウギョウに行く。
- ④ いいにおいがビコウをくすぐる。
- ⑤ 不祥事で大臣がコウテツされた。

(イ) カンヨウ

16

- ① 敵にカカンに立ち向かう。
- ② カンカできない失敗が発覚する。
- ③ 父からカンドウを言い渡される。
- ④ 母はカンゾウにより食事を心がけている。
- ⑤ タイカンを鍛えると姿勢がよくなる。

(ウ) キョウドウ

17

- ① 自然災害のキョウイに備える。
- ② 会社が労働者とキョウテイを結ぶ。
- ③ 米のキョウキュウが滞る。
- ④ 試験に合格してキョウキ乱舞する。
- ⑤ 陸上キョウギの選手を目指す。

問2

空欄

X

解答番号は、

18

・

19

Y

を補うのに最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

(配点6点)

X

18

- ⑤ 言語化
- ④ 一般化
- ③ 形骸化
- ② 細分化
- ① 可視化

Y

19

- ⑤ 一義的
- ④ 公的
- ③ 逆説的
- ② 決定的
- ① 端的

問3

空欄

A

く

D

を補うのに最も適当なものを、次の①～⑧の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。ただし、同じ番号は一度しか選べない。解答番号は、A **20**、B **21**、C **22**、D **23**。
(配点8点)

- ① だから
- ② 例えば
- ③ つまり
- ④ なぜなら
- ⑤ ところで
- ⑥ ただし
- ⑦ むしろ
- ⑧ あるいは

問4

傍線部(1)「感覚間情報の不一致」とあるが、この例として**適当でない**ものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は、

24。

(配点5点)

- ① 自分の足に痛みを感じてその場所をそっと触ってみたが、その場所に傷などはなかった。
- ② 自分では右手を動かしていたつもりだったが、右手を確認したら動いていなかった。
- ③ 自分の腕が体の下敷きになって圧迫されており、しびれて感覚がなくなっていた。
- ④ 自分の右手を友人が握るのを見ているときに、手を握られている感じがなかった。
- ⑤ 自分は特に手を振っているつもりはなかったのに、右手が勝手に動いていた。

問5

傍線部②「『からだ』というものが、複数の感覚の情報が相互に整合的であることによって生じている」とあるが、どういふことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、25。(配点5点)

- ① 私たちは一つの出来事に対する自分の複数の感覚にずれや矛盾がないことを確認した場合に、それが自分の身体だと認識できるということ。
- ② 私たちは何か出来事が起こったとき、それについての複数の異なる感覚を感知することで、自分の身体を確認しているということ。
- ③ 私たちは一つの出来事について感覚器官を通して複数の刺激を同時に感じることで、自分の身体の形状を把握しているということ。
- ④ 私たちは複数の感覚の中からその出来事に整合しているものを見つけられたときに、初めて身体を自分のものだと認められるということ。
- ⑤ 私たちは出来事についての複数の感覚が鮮明に感じられたときに、そこが自分の身体の一部だという感覚をもつことができるということ。

問6

傍線部③「オーケストラ認知」とあるが、「からだ」の特性とそれについてのオーケストラ・ポップミュージックのたとえを組み合わせたものとして**適当でないもの**を、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、26。(配点5点)

- ① 複数感覚由来の位置情報……ピッチ（周波数）
- ② 身体のリアリー……一楽器から出される音
- ③ 複数感覚間の時間整合……ミキシング作業
- ④ 個々の感覚器官が生み出す感覚……楽器単体のフレーズ
- ⑤ 身体の形……倍音を含む楽器の音の波形

問7

傍線部(4)「それでは『からだ』において、感覚間の時間にズレがあると、どんなことが起きるでしょうか？」とあるが、これについての思考実験の内容をまとめたものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は、

27。

(配点5点)

- ① 腕を触られている人の視覚が触覚よりも遅れているときは、視覚が触覚より早く感じられるときと比べて、より腕が自分自身から切り離されているように感じる。
- ② 腕に描かれる視覚的な軌跡が触覚よりも遅く感じられたり、反対に視覚が触覚に先行しているように感じられたりすると、その人の身体感覚は失われてしまう。
- ③ 腕を触られているとき、視覚が触覚よりも早く感じられる場合も、触覚が視覚よりも先に感じられる場合も、腕が自分の身体の一部であるという意識が薄れる。
- ④ 腕を触っている人の感覚と触られている人の感覚に時間的な差が生じた場合、腕を触られている人は、その腕が自分のものであるという感覚を失ってしまう。
- ⑤ 腕を触っているとき、触覚が視覚よりも遅れていたたり、逆に視覚が触覚よりも遅く感じられたりすると、そのときの感覚が自分のものであるという実感がなくなる。

問8

傍線部(5)「単一の楽器演奏であっても、音楽として昇華することができる」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、28。(配点5点)

- ① 実際に聴こえる音と、その音を耳にした人の心に湧き上がる感情が重なり合って、よい音楽になるということ。
- ② 演奏による物理的な音響と、それを聴いている人の周りの音とが合わさって、一つの音楽が生まれるということ。
- ③ 演奏の一部を聴いた人の脳内で再生される曲が実際の音響を上書きすることで、原曲が再現されるということ。
- ④ 楽器単体の演奏を聴いた人が脳裏で足りない音を補うことにより、その人の中に音楽が完成するということ。
- ⑤ 楽器単体のフレーズを聴いた人が原曲をもとに演奏を付け加えることで、すばらしい曲が完成するということ。

問9

本文の内容に合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、29。

(配点5点)

- ① 「からだ」の感覚を生み出すためには、複数感覚の時空間的な差に加え身体形状の視覚的な差異が必要である。
- ② 「からだ」の感覚が損なわれると身体の一部が勝手に動きだし、ときに自分への攻撃性を感じる場合がある。
- ③ 「からだ」の感覚を認識するためには、複数感覚の位置情報と身体の見覚像とが整合していなければならない。
- ④ 「からだ」の感覚が失われる背景には、身体が視覚的な認識といつまでも整合しないことによる不和がある。
- ⑤ 「からだ」の感覚を安定的に維持するには、複数の感覚が時空間的に一致し、身体形状が適切に示される必要がある。